

— 次の文章を読んで、問いに答えよ。

人生のあらゆる場面、そして毎日の生活のなかでわれわれは「お面」をかぶり、さまざまなシバイの舞台で演技し、心にもないセリフを口にしてしているのだから、それは「ほんとうのじぶん」^⑦ではない。いつでも「他人の目」にどう映るか、を気にしながらいろんな仮面をかぶっているのである。G・H・ミードはそれを「見られる自我」と名づけ、そそがれてくる視線のことを「一般化された他者」ということばで表現した。ひらたくいえば「世間」ということである。「世間の眼」がわたしたちをみているのである。

とすると、われわれの「存在」というのは何枚もの皮に包まれたラッキョウのごときものではないか。われわれは「役割人間」である。そのさまざまな役割はラッキョウの皮である。何重にもかさなつたそれらの皮をつぎつぎにむいてゆけばラッキョウはだんだん細くちいさくなってくるが、もしも「ほんとうのじぶん」というものがあるとすれば、それは皮をむいて、むいて、むきつくしたところにあるにちがいない。(I)「じぶんさがし」ということばがあるが、それはべつなことばでいえばラッキョウの皮むきということにほかならない。演技するじぶん、お面をかぶつたじぶん……そんな他人を気にせずに、真実、これこそほんとうの「じぶん」、それがどこかにあるにちがいない。だからその探索のためにわれわれは「じぶんさがし」の旅にでかけるのである。

その結果どうなるか、あるいはどうなったか。(II)ラッキョウの皮を一枚ずつはがしてゆけば、だんだん「見られる自我」の数は減つてゆくだろうが、ラッキョウには期待していたようなシンはないのである。皮をむきつくしたところにはなんにもない。「虚」なのである。

だいぶむかしのことになるが、「わたし」という劇があつた。主人公はただひとり。その主人公とカゲの第三者との問答。問い「あなたは誰?」、答え「山田太郎です」。問い「それを証明できますか?」、答え「はい、ここに身分証明書があります」。問い「その証明書がホンモノだと証明できますか?」、答え「ハンコが押してあります」。問い「ハンコなんていくらでも偽造できるじゃないの。ほんとにあなたは誰なの?」……あなたの名前も、またそれを確実に立証してくれる手段もない。だいたい「名

前」などというものだって便^①ギ上つけられたもの。名前があるからといって、そんなものなんの役にもたたない。(Ⅲ) いきなり知らない世界のどこかにひよいとほうり出されたらどうなるか。自己証明は不可能にちかい。むずかしくいえば「自己が自己であることの証明」は不可能なのである。(Ⅳ)

もちろん、理屈ならいくらでもかんがえることができる。たとえば『莊子』は「ほんとうのじぶん」について、いくつものソウ話を語ってくれる。みずからの影から逃れようとして疾走^{しつそう}して死んでしまう話、世間についてゆくことができず、みずからの無能に絶望する「寿陵ノ余子」の話、そしてあの有名な「胡蝶の夢」の話などなど。莊子は、だいたい「ほんとうのじぶん」などというものはないのだ、という立場をとる。いや莊子の思想そのものが自己というものに懐疑的なのである。

禅はむずかしいが、俗人にもわかるように禅の要諦^{ようてい}を説いてくださった坊さんもおられる。たとえば白隱^{はくいん}。白隱の禅画はどれをみても含蓄があつておもしろいが柿本^{かきのもの} 人麻呂^{ひとまろ}の詩歌に託して「今に到り明石の浦の朝霧に嶋有り船有るも其の人なし」と賛を書いた奔放な一幅の絵などは傑作だ。目的の島は霧にかすんでいる。そこにゆくべき舟もある。だが「其の人」はいないのである。(Ⅴ) そもそも「人」はいるのだろうか。いくらさがしてもいない。ア、と禅は教えてくれる。禅は「ない」ことを主題にした哲学だから、ラッキョウの皮むきじたいを否定する。

西洋でおなじようなラッキョウの皮むきの意味をたずねたのは、たとえばキュルケゴールのような「実存主義者」であった。かれがいう「深淵^{しんえん}」というのはラッキョウのシンが「無」であるということにほかならなかった。古今東西、イを哲学者たちは論じてきたのである。

だが、こうした議論は哲学的思索としてはおもしろいが、社会的存在としての具体的な人間、つまり「世間」で生きている人間にとつてはあまり意味のあるものではないだろう。おたがい凡俗の身はおおむね「役割」で生きている人間なのである。おおかれすくなかれ、われわれの人生は演技なのである。ユングの心理学ではその仮面的存在を「ペルソナ」とよび、そこから「パースナリティ」ということが派生した。「パースナリティ」は「性格」と訳されているけれども、簡単にいえば「仮面人間」ということだ。

フロイトの「超自我」(スーパーエゴ)もこれと似ている。「超自我」というのは「見られるわたし」のことである。精神分析の立場からみても **ウ**、ということになりはしないか。ラッキョウにはシンがないのである。ないものを探索するのはムダというものはあるまいか。②これは「社会学」の対象ではあるまい、とわたしはおもっている。

「自我」というものが哲学的にめんどろなものであることはいままたとおりだが、世間ではひとりの人間、(a)、あなただのわたしだのを個別に認識し、他人と区別してくれる。その「区別」のモノサシのことを「社会的分類」と名づける。

といって、べつだんむずかしいはなしではない。似顔絵描きとおなじように、世間は特定の人間の輪郭を描いてそれぞれのひとのイメージをつくっているのである。そのイメージが「プロフィール」である。日本語でいえば「人物像」とでもいうべきか。社会的分類のモノサシは無数にある。まず、基本になるのは「年齢」「性別」という分類。「人種」という分類もある。「国籍」も明確なモノサシである。それぞれの「国籍」を下位分類して「地域」というモノサシをあててみることも可能だ。

こんなふうに数本の線で輪郭を描いてみると、ほんのりとプロフィールの一部ができてくる。(b)「男性四十八歳、独身、身長百五十五センチ、七十歳の母親と同居」ときけば、どちらかといえばバツとしない中年男のイメージになる。(c)、さらにいくつかのモノサシを用意して「某国立大学卒業、オックスフォード大学で博士号取得後、帰国して某大手薬品工業会社の研究所長、年収二千万円」というと、この人物に後光がさしてくる。逆に「無職、競馬競輪に熱中、飲酒癖あり。アルバイト収入年間百五十万円」となると、おなじ四十男でもその「人物像」の輪郭はすっかりちがったものになるではないか。

モノサシはまだまだたくさんある。「^③キレ症」「身長」「体重」「趣味」「資格」「好きなテレビ番組」「嫌いな食べ物」……数かぎりない補助線をひいて、それを交差させたり、特定の部分を強調したり、ボカしたり、陰影をつけたりしてゆくと、かなり輪郭のしっかりした人物像ができあがってくるだろう。

そうしてできあがった「プロフィール」によってわたしたちはひとを判断する。その思い描いた人物像を基準にして「東大出のくせに」とか「さすが関西人、目先がよく利くなあ」といったふうに判断に狂いがなかったことを確認する。

いろいろな変数を組み合わせてつくりあげたプロフィールが、ただしいものかどうかはわからない。

VI

そんなふうには勝手につくりあげたプロフィールでひとや人柄をあらかじめ「区別」することをばあいによっては「偏見」とい、あるいは「差別」という。おおむねいい意味でつかわれることばではない。(d)「あのひとは慈善家なんだって」「彼女は司法試験に一発で合格したんだって」とかいった好意ある評価だって「偏見」であり「差別」なのである。わたしたちはだれだって、そういう偏見によって他人をみているし、他人からも偏見によってみられているのだ。俗なことばでいえば、わたしたちは「A」で自他をみているのである。わたしたちはひとりの例外もなく偏見のかたまりなのである。

さきほどわたしは「自我」というものはしよせんラッキョウのシンのような虚無であろう、とのべた。だが世間は外側にある何枚、何十枚、いや何百枚もの皮、すなわちモノサシを用意してひとを評価しているのだ。その分厚い皮膚におおわれて人間はつねに他人から「見られて」いる。そして同時に他人をみている。だんだん交際が深まれば、「A」が変化することがすくなくないが、それでも「全人格」が理解されることはありはしない。^(e)そもそも「全人格」などというものがある、というのが錯覚なのである。

このラッキョウの皮、(e) 社会的分類のどの部分に力点をかけて人間をみるか、によってさまざまな問題がみえてくる。いい例が経済的分類。つまり貧富という分け方である。いっぽうには大金持ちがいる。他方、底辺のひとびとがいる。そこでもまれるのは「格差」である。おなじしごとをちゃんとこなしながら、男女で給与に差があれば、これも「格差」である。そういう目で世間をみれば「格差」だらけ。人間すべて平等というのはうるわしい哲学だが、世の中は哲学どおりにはうごかない。わたしたちはあれやこれやの「格差」や「偏見」というデコボコ道をあゆんでいるのだ、といってもよい。

それらたくさんのモノサシで人間がおたがいをみたり、みられたりというめんどうなことになったのはひとえに世間が複雑になったからだ。石器時代の人間がもっていたモノサシはせいぜい性別、それに長幼の序列くらいだったにちがいない。もろもろ

の社会的分類から自由であれ、と説いたのは安藤昌益あんどうしやうえきであり、ジャン・ジャック・ルソーであったが、歴史をもとにもどすことはできないようにもわれる。

注 G・H・ミードミードはアメリカの社会心理学者・哲学者。

(加藤秀俊『社会学』。なお、文意を損なわない範囲で若干の省略をおこなっている。)

『莊子』は中国の思想家である莊子の著作。

白隠は江戸時代中期の僧。臨済宗中興の祖。

キユルケゴールはデンマークの思想家。

ユングはスイスの心理学者・精神科医。

フロイトはオーストリアの精神科医・精神分析の創始者。

安藤昌益は江戸時代中期の思想家。

ジャン・ジャック・ルソーはスイスに生まれたフランスの啓蒙思想家・小説家。

問1

傍線①～③のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものはどれか。次の中からそれぞれ選び、その番号を解答番号

1

1	① 便 <small>びん</small> ギ	1 詮 <small>せん</small> ギ	2 字 <small>じ</small> ギ	3 適 <small>てき</small> ギ	4 虚 <small>こ</small> ギ	5 詐 <small>さ</small> ギ
2	② ソウ話	1 失 <small>しつ</small> ソウ	2 ソウ括	3 奇 <small>き</small> ソウ	4 ソウ刊	5 ソウ入
3	③ キ往症	1 キ出	2 キ遇	3 キ憂	4 克 <small>こく</small> キ	5 キ概

問2 傍線①「『ほんとうのじぶん』とあるが、筆者はそれをどのように考えているか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

- 1 たんなる「じぶん」ではなく真実の「じぶん」のことだと考えている。
- 2 「見られる自我」に内包された真実の「自我」と同義だと考えている。
- 3 さまざまな「役割」の担い手としての主体的な「自我」だと考えている。
- 4 「じぶん」への違和感を抱える人が追求する本来の姿だと考えている。
- 5 いくら探求しても見つけることができない「じぶん」だと考えている。

問3 本文中の(Ⅰ)～(Ⅴ)のいずれかに、次の一文が入る。それはどこか。後の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

たいへん無残ないいかたになるが、わたしの意見ではそんなもの、ありはしない。

- 1 (Ⅰ)
- 2 (Ⅱ)
- 3 (Ⅲ)
- 4 (Ⅳ)
- 5 (Ⅴ)

問4

ア

ウ

6

にマークせよ。

に入る語句の組み合わせとして最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号

- 1 ア 「じぶんさがし」というのは、まずもって不可能なことなのだ
イ 「ほんとうのじぶん」をさがすことがいかに無謀なことであるか
ウ 「ほんとうのじぶん」とは自己を超越したものである
- 2 ア 「じぶんさがし」というのは、まずもって不可能なことなのだ
イ 「ほんとうのじぶん」をさがすことがいかに絶望的なことであるか
ウ 「ほんとうのじぶん」などというものはありえない
- 3 ア 「じぶんさがし」というのは、そもそも無理な相談なのだ
イ 「ほんとうのじぶん」をさがすことがいかに無益なことであるか
ウ 「ほんとうのじぶん」などというものはありえない
- 4 ア 「じぶんさがし」というのは、相当の労力があることなのだ
イ 「ほんとうのじぶん」をさがすことがいかに無謀なことであるか
ウ 「ほんとうのじぶん」とは自己を超越したものである
- 5 ア 「じぶんさがし」というのは、そもそも無理な相談なのだ
イ 「ほんとうのじぶん」をさがすことがいかに絶望的なことであるか
ウ 「ほんとうのじぶん」とはあくまで「理想のじぶん」にすぎない

問5 傍線①「簡単にいえば『仮面人間』ということだ」とあるが、「仮面人間」とは何か。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 **7** にマークせよ。

- 1 「見られる自我」を意識しつつ「個性」を隠して振る舞う人間
- 2 「ペルソナ」としての「自我」にさまざまな演出を加える人間
- 3 「役割」を巧みに演じるうちに「世間」を見失いつつある人間
- 4 「世間の眼」を気にしながらさまざまな「役割」を演じる人間
- 5 「パースナリティ」を巧みに駆使して「世間の眼」を欺く人間

問6 傍線②「これは『社会学』の対象ではあるまい」とあるが、筆者は社会学の対象をどのようなものと考えているか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 **8** にマークせよ。

- 1 問題が山積する現代社会から「差別」や「偏見」、「格差」の問題を取り除く方法を模索する学問が社会学であり、そこに生きる具体的な人間は対象ではないと考えている。
- 2 「ほんとうのじぶん」を追究する学問ではなく、「役割人間」や「仮面人間」、そしてそれらを取り巻いている「世間」そのものを扱う学問が社会学であると考えている。
- 3 社会の複雑化に伴い「社会的分類」が多様化し、人が「役割人間」として生きざるを得ない状況へと陥った経緯やその原因を追究する学問が社会学であると考えている。
- 4 机上の空論で終わらせる学問ではなく、さまざまな問題を解決するための具体的方法を模索・提案し、なおかつ、その方法を実践する学問が社会学であると考えている。
- 5 「ない」ものの「ある」可能性を模索する学問ではなく、人類が今日までに生み出してきたさまざまな社会的分類の意味や是非を問う学問が社会学であると考えている。

問7 (a) (e) の語句の組み合わせとして最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号

9 にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | a | いわば | b | かりに | c | そこで | d | でも | e | しかるに |
| 2 | a | 要するに | b | つまり | c | ただし | d | それゆえ | e | たとえば |
| 3 | a | すなわち | b | そこで | c | ところが | d | つまり | e | 要するに |
| 4 | a | つまり | b | たとえば | c | でも | d | しかし | e | すなわち |
| 5 | a | しかるに | b | それゆえ | c | しかし | d | ただし | e | いわば |

問8 VI には、次に示す五つの文を並び替えたものが入る。後の中から最も適当な並び順を示したものを選び、その番号

を解答番号 10 にマークせよ。

- ① たったひとりを採用しようとしているのに、万人平等の原則で数千人ぜんぶに面談というわけにはゆかないのである。
- ② ときには、いやしばしば、頭のなかで構築した人物像と本人とはずいぶんちがっている。
- ③ 学歴、経験、資格などからみて不適格と判断された人間はなかなか面接にまでこぎ着けない。
- ④ たとえば人事採用は「人物本位」というけれども、担当の求人係は履歴書を見て基本的ないくつかのモノサシで応募者をふるいわけける。
- ⑤ だが、現実にはそれを確認するわけにはゆかない。

1 ②ー④ー①ー⑤ー③ 2 ②ー⑤ー④ー③ー① 3 ④ー②ー①ー⑤ー③

4 ④ー③ー②ー①ー⑤ 5 ④ー⑤ー③ー②ー①

問9 A に入る語句として、最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号 11 にマークせよ。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|-----|---|-----|---|-------------------------|---|------|
| 1 | 欲目 | 2 | 万華鏡 | 3 | 色眼鏡 | 4 | 曇り硝子 <small>がらす</small> | 5 | ひいき目 |
|---|----|---|-----|---|-----|---|-------------------------|---|------|

問10

傍線⑤ 「そもそも『全人格』などというものがある、というのが錯覚なのである」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 12 にマークせよ。

- 1 「見られる側」を覆うラッキョウの皮を「見る側」がどれほど熱心にむき続けたとしても、シンに達することは決してないから
- 2 人が互いを理解しようと多くの月日を費やしたところで、理解し合えるのはあくまで「仮面」を被った互いの姿にすぎないから
- 3 「見られる側」に引かれた無数の補助線を慎重に消してみたところで、輪郭線のみを浮き彫りにすることはもはや不可能だから
- 4 どれほど多くのモノサシを駆使して無数の補助線を引いてみたところで、内面まで精密に描き切ることなどはや不可能だから
- 5 どのモノサシでどのように補助線を引き、どのような陰影をつけるかによって、描き出される人物像は異なってくるものだから

問11

傍線⑥ 「歴史をもとにもどすことはできないようにおもわれる」とはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 13 にマークせよ。

- 1 社会の複雑化に伴って構築されてきた数多くの社会的分類を今さら無視などできないということ
- 2 人類が時間をかけて制定してきた数々の社会制度を今さら手放すことなど無理であるということ
- 3 社会が生み出してきたさまざまなモノサシをこの先使用するなどはゆめゆめ言えないということ
- 4 「もろもろの社会的分類から自由であれ」という思想家の言説は空虚な理想論であるということ
- 5 石器時代から今日までの時間の経過を今さらさかのぼってみることなど不可能であるということ

問12

本文の内容に合致しないものはどれか。次の中から一つ選び、その番号を解答番号

14

にマークせよ。

- 1 社会生活を営むうえで個人識別や身元保証のために通常用いられている名前や身分証明書、印鑑などの類のものは、自己が自己であることの証明には実のところ一切役に立たない。
- 2 人間はみな社会的存在としての具体的人間であることから、その実態に関わらず、ときに社会的分類に従って評価が下されることについては、ある程度は仕方がないところがある。
- 3 人間はときとして「ほんとうのじぶん」を探し求めようとするものだが、元来そんなものはないのだから、むしろ他者にどのように見られたいかを意識して生きてゆく必要がある。
- 4 人間が他者を評価したり他者から評価されたりするときの指標となるモノサシは、社会が複雑化するにつれてその数を増やし、そこから自由であろうとすることをより困難にする。
- 5 人間は他者と接することにより当初思い描いていた人物像を変化させることがしばしばあるが、どれほど交際を密にしたところで、他者の全人格を把握することなど不可能である。

(このページは白紙)

二 次の文章を読んで、問いに答えよ。

オーウェルによれば、政治の言葉の特徴とは、論点をぼやかす曖昧で婉曲な言い回し、物事を名指しつつ、それに対応するイメージを喚起させないことを狙った決まり文句である。そのような言葉は、苛烈な現実をオブラートに包んで曇らせ、人々の感受性や想像力を麻痺させる。いや、それだけではない。「政治の言葉は、保守党員からアナキストまで様々な違いはあるものの、どれも、嘘を本当と思わせ、殺人を立派なものに見せかけ、空虚なものを実質の備わったものに見せようという意図をもっている」。

ひとつ、日本語の例を挙げてみよう。「遺憾」という言葉は現在、政治やビジネスをはじめとする様々な場面で常套句として流通している。この言葉は本来、「思っているようにならなくて心残りであること。残念な、そのさま」を表すはずだが、自分の行いを後悔し、申し訳ないとはつきり詫びるべき場面でも濫用されている。そこには、現実を自分が謝罪しなくてもよい場面——残念に思うだけでよい場面——に見せよう、現実の方を改変しようという意図が働いていると言えるだろう。

ここで重要なのは、「遺憾」とは「残念に思うこと」と「申し訳ないと思うこと」という二つの意味を持つ多義語ではない、ということである。この言葉には後者の意味はないにもかかわらず、「すみません」と言うべき場面で「遺憾です」ということによつて、論点をぼやかし、嘘を本当と思わせ、空虚なものを実質の備わったものに見せることが自ずと企図されているのである。

もうひとつ、最も悪質な例を挙げよう。それは、ナチスやそれを支持する人々が、ユダヤ人を「害虫」と繰り返しレッテル貼りし、あげくには実際に虫けらのように殺戮したことである。「害虫」という言葉は当然ユダヤ人を意味するものではないにもかかわらず、彼らをそう呼び、ついにはそれらと文字通り同じ扱いをした。つまり、これも、常套句によつて現実を曇らせるだけでなく、現実そのものを歪めて常套句に合わせてしまうことにほかならない。その意味では、「ヴェールとしての言葉」という有り様が現実——しかも究極の仕方——あらわれているのが、ナチスのプロパガンダの言葉と言えるだろう。

クラウスの慧眼は、オーウェルと同様の分析を、ヒトラーが政権を握る遙か前に提示していることにある。粗雑な政治の言葉

が行き交い、常套句が氾濫し、言葉が本当にヴェールと化していく社会を見つめながら、彼は、人々が自分の話す言葉に耳を傾け、自分の言葉について思いを凝らし始めることに、戦争から遠ざかる一縷の望みを確かにつないでいた。だからこそ彼は、しっくりくる言葉を探すよう努めるといふ、一見すると些細で個人的なこだわりに過ぎないかに思える営為を、「行われるべきこととしては最も重要な責任でありながら、現に行われていることとしては最も安易な責任」と呼んだのである。

ヒトラーの陶酔的な演説は聴く大衆をも酔わせ、宣伝省が新聞やラジオ、テレビ、映画など様々なメディアを通じて流したプロバガンダは、その高揚を戦争や殺戮へと誘導していった。繰り返して流れてくる常套句、その音声上のリズムや抑揚にただ身を任せ、浸っているときに忘れ去られているのは、まさしくかたち成すものとしての言葉の側面であり、言葉を選び取るときに生まれる「これではまだしっくりこない」〈これでは……過ぎる〉といった「迷い」である、そうクラウスは主張している。

そして、彼はこの「迷い」を、我々に対する「道徳的な贈り物」と呼んでいる。これにはいくつかの意味合いが含まれているだろう。ひとつは、我々に受け継がれた文化遺産としての言語には、無数の多義語が含まれ、互いに複雑に関連し合っているということである。〈しっくりこない〉〈どうも違う〉といった迷いは、類似した言葉の間でしか生まれえない。我々は、迷い、ためらうことを可能にする言語を贈られているのである。

(a)、この迷いの感覚がとりわけ道徳的な贈り物であるのは、それが常套句の催眠術にかからないためのわずかな拠り所であるからだ。出来合いの常套句で手取り早くやりすこし、夢見心地でうっとりしているときに、言葉に意識を向けることはできない。迷うためには、醒めていなければならぬ。そして、しっくりくる言葉を体験するとき、言葉が胸を打ち、かたちを成すとき、人はこの上なく覚醒している。言葉は、「陶酔によってではなく、この上なく明澄な意識によって存在へと汲み上げられる」のである。(b)、ここで求められているのは、醒め続けることであり、しっくりくる言葉を見出すまでは妥協しないよう努める責任、どこまでも自分を欺くまいとする倫理である。その意味で、しっくりこないという感覚が湧いてくるのは道徳的な贈り物であると、クラウスは指摘しているのだろう。

彼自身が述べている通り、覚醒したなかで言葉を選び取るというのは、言葉が創造される場面として我々が思い描きがちであ

種の神話的なイメージと相反している。(c)、詩人が陶醉状態のなかで喚起力に富んだ言葉をとめどなく紡ぎ出す、というイメージである。確かに、詩人がそうした幸福な創作の時期を迎えることもあるのかもしれない。(d)、それが一握りの天才の、しかもたいていの場合ごく若く限られた時期にしか訪れないものであることも確かである。クラウドが責任の問題として見つめるのは、そうした天才の創作ではなく、日常の生活における我々の言葉の使用である。

(e)、同時に思い起こすべきなのは、自他が用いる常套句の空虚さが耐えられないというのは、言葉だけでなく^①世界全体がよそよそしい異物として感じられるということである。世間に^{おびただ}夥しく流通し、日常で人々がためらうことなく用いているステレオタイプな物言いがいちいち気になること、マス・メディアで著名人が^{りゆうちやう}流暢に繰り出す紋切り型のコメントひとつひとつが引つ掛かること——そうした変調が意味するのは、世間の波に自分が自然と乗れなくなり、その意味で孤独になることでもある。そして、それはまた、自分と外部の世界との関係がごちかなくなり、世界が不確かで信頼できないものとして立ち上がってくる、その入り口に立つということでもある。つまり、自他が用いる言葉の確かさへの^{ツヴァイフェル}迷いは、世界全体への^{ツヴァイフェル}懷疑へと通じる可能性を確かにもっているということである。(1)

ともあれ、世間の波に同調してその流れの一部となるのではなく、逆に醒め、そこから距離をとるというのは、全面的なゲシュタルト崩壊につながる危険があるということとは間違いない。では、^②彼らのように、もう一度以前の幸福な時期に、^{むく}無垢な状態に、束の間でも戻る奇跡をひたすら待つべきなのだろうか。彼らにとってそれは、言葉以外のものが生き生きと立ち現れている状態、世界と親密であり、周囲の事物と言葉を^{介さず}に直接交わっている状態のことであった。そうした、自らも大いなる統一体の一部として融け^と込むような陶醉状態に入ること^{を願うべきなのだろうか。}(2)

クラウドは、ここではつきりと別の道を提示している。彼はむしろ、いま述べた意味での孤独を引き受け、醒め続けるよう促す。それが、彼の言う「言葉を選び取る責任」を果たす道なのである。(3)

そして、彼のこの姿勢の背後にあるのは、言語の^{ほうじやう}豊饒な可能性に対する揺るぎない信頼にほかならない。なるほど、常套句に^{ツヴァイフェル}対して疑いの目を向けることは、お約束の型通りの流れを止めることであり、世界が不確かが無意味なものとして立ち現れる

きつかけになりうるという意味で、いわば深淵しんえんを覗き込むのぞことに比されるかもしれない。しかし、そのように「常套句の存在するところに深淵を見て取ること」は、常套句に代わる言葉を探し、常套句が押しつけてくるような貧困で曖昧な見方や一面的な見方をずらす、そのきつかけにもなりうるのである。クラウスはこちらに賭ける。しっくりこないという違和感を頼りに〈言葉の場〉を探索していく先で、しっくりくる言葉が本当に訪れてくれるかどうかは定かではない。ただ、これは実際のところ、手堅い賭けである。韻律や隠喩等のテクニク、あるいは詩人の天賦の才といったものは必ずしも必要ない。自然言語は、凡人の手探りの探索に応えられるだけの豊かな語彙や、創造性・柔軟性を湛たえている。(4)

そして、もう一方の信頼の内実は、自然言語の自律性である。^⑦ある言葉がしっくりくるかどうかというのは、言葉を探している当人の主観的な感覚に拠っているかに見えながら、当人が意のままに決められることではない。ぴったりの言葉は不意に、いわば「向こう」から訪れるものである。あるとき言葉がかたちを成すのは、関連する無数の言葉が生活の様々な場面で用いられ、相互浸透を生み出してきた長い歴史が背景にあるがゆえであって、その有機的連関の力学は人によるそのつどのコントロールが及ぶものではない。たとえ公的機関の審議会やカク議^①によって「言葉の意味の決定」が恣意的に行われたとしても、そのお仕着せの言葉は人々にとってはしっくりこないどころか、しばしば強い違和感や反発を覚えさせるだろう。(5)

作家の森鷗外は、当時の文部省が行おうとしていた仮名遣いの改定案に反対する演説のなかで、古代のローマのある逸話を紹介している。時の皇帝ティベリウスが話をしていて言葉遣いを間違えた。その際にカピトという臣下は、皇帝の口から出たならば、その言葉は立派なラテン語である、と取り入れた。しかし、別の臣下マルケルスはこれにキ然②と反論したという。

カピトは違和感に蓋をして、体制に **A** する方を選んだ。それに対してマルケルスは、皇帝といえども言葉を歪め、言語を意のままに作りかえることなどできないとカッ破する。クラウスも同様の **B** の道を勧めるわけだが、彼はなにも、言葉の慣習的な使い方や文法規則を墨守せよと主張しているわけではない。言葉同士の繊細な表情の違いに分け入っていく〈言葉の実習〉を続け、それを通して自らの言語感覚を鍛錬し、研ぎ澄ませたならば、その感覚に忠実であり続けようとする、どこ

までも自分を欺かないこと——彼が人々に期待したのはこの一点である。

一九三四年、ヒトラーをはじめとする独裁者たちがヨーロッパ各国で台頭し、全体主義が勢いを増すなか、クラウスは、「今日、言葉以外はすべてを支配している独裁制」に抗するために、改めて、「言葉の実習」を行うよう訴えている。政治やジャーナリズムの場では、「言語を支配することができる」という妄想^①がしばしば湧き起こる。そして、ナチスのプロパガンダの成功は、あたかもその妄想が真実であるかのような錯覚を覚えさせる。実際、オーウェルは、「独裁制の結果、ドイツ語もロシア語もイタリア語もすべて、これから十年から十五年の後に墮落してしまう」という見通しを述べている。とはいえ、言語それ自体が——というより、人々が言語を使用してきた長く複雑な歴史が——墮落することはありません。独裁制にせよ、他の政治形態にせよ、言語それ自体を支配することはできないのだ。可能なのは、それが顧みられなくなること、忘れ去られることである。すなわち、人々が常套句の使用で妥協し、感受性や想像力を麻痺させることによって、言葉同士の繊細な表情の違いを感じられなくなることである。

（古田徹也『言葉の魂の哲学』。なお、文意を損なわない範囲で若干の省略をおこなっている。）

注 オーウェル⇨イギリスの作家。

プロパガンダ⇨特定の主義や思想についての政治的な宣伝。

クラウス⇨オーストリアの作家・ジャーナリスト。

ステレオタイプ⇨多くの人が共通して持っている固定観念。

ゲシュタルト崩壊⇨知覚において、全体性が失われ、個々の部分としての状態で認識されるようになる現象。

問 1 傍線①～③のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものはどれか。次の中からそれぞれ選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

15	① カク議	1 カク心	2 カク張	3 カク離	4 楼カク	5 皮カク
16	② キ然	1 高キ	2 靡キ	3 キ制	4 発キ	5 剛キ
17	③ カツ破	1 円カツ	2 カツ采	3 カツ望	4 カツ愛	5 管カツ

問 2 傍線ア「現実の方を改変しよう」という意図が働いている」とあるが、それはどういふことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

- 1 「遺憾」という言葉を用いることで、曖昧な自分の心情を客観的な意味に変えようとする事
- 2 「遺憾」という言葉を用いることで、多義的な意味を誤解のないように限定しようとする事
- 3 「遺憾」という言葉を用いることで、自己の過失をごまかして状況を有利に進めようとする事
- 4 「遺憾」という言葉を用いることで、心中の後悔と謝罪の念を社会に周知させようとする事
- 5 「遺憾」という言葉を用いることで、あえて自分の苦しい心情を周囲に強調しようとする事

問 3 傍線イ「言葉が本当にヴェールと化していく社会」とあるが、それはどういふ社会か。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

- 1 言葉の意味が多義的になり共通理解が成立しなくなる社会
- 2 言葉が現実を完全に代理せず常套句のみが横行する社会
- 3 言論弾圧により個人同士の言葉の有機的連関が弱まる社会
- 4 最も重要である個人の言語のこだわりが廃れてしまう社会
- 5 言葉によって自己と世界との交渉が分断されてしまう社会

問4 傍線㊦「彼はこの『迷い』を、我々に対する『道徳的な贈り物』と呼んでいる」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 20 にマークせよ。

- 1 感受性や想像力を麻痺させる常套句に妥協せず、しつくりくる言葉を探し求めるための覚醒を促すから
- 2 これまでに受け継がれてきた文化遺産として、言語の多義的な意味を選び取る楽しみが与えられるから
- 3 詩人の天賦の才によって紡ぎ出された豊かな言葉によって、夢心地の気分を体験することができるから
- 4 公的機関が自らの都合で言葉の意味を変えようとする暴力に対して、違和感を持つことができるから
- 5 人々の間に流通するステレオタイプなもの言いによって、世界全体への懐疑を生じさせる力となるから

問5 (a) (e) に入る語句の組み合わせとして、最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号 21 にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | a | それから | b | ところが | c | たとえば | d | あるいは | e | しかし |
| 2 | a | それから | b | つまり | c | すなわち | d | ただし | e | しかし |
| 3 | a | むしろ | b | ところが | c | すなわち | d | あるいは | e | しかし |
| 4 | a | むしろ | b | つまり | c | すなわち | d | ただし | e | 要するに |
| 5 | a | それから | b | つまり | c | たとえば | d | あるいは | e | 要するに |

問6 傍線⑤「世界全体がよそよそしい異物として感じられる」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、

その番号を解答番号 にマークせよ。

- 1 自分だけ他人と異なる言語使用を行うと、世間からは異端者として扱われるから
- 2 日常の空虚さに耐えられないと、言葉以前の世界こそが真実だと思えてくるから
- 3 自他が使う常套句を信じられないと、世界から異端者としての扱いを受けるから
- 4 言葉の確かさへの迷いが生じると、世界の存在そのものが信じられなくなるから
- 5 世間の波に同調し続けると、そのうちに自己の存在が空しく感じられてくるから

問7 本文中の(1)～(5)のいずれかに、次の一文が入る。それはどこか。後の中から最も適当なものを選び、その番号を

解答番号 にマークせよ。

これが、クラウドが言語に寄せる信頼の一方の内実である。

- 1 (1)
- 2 (2)
- 3 (3)
- 4 (4)
- 5 (5)

問8 傍線④「彼ら」とあるが、それは誰のことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

- 1 プロパンガンダによって現実を曇らせるナチス
- 2 喚起力に富んだ言葉をとめどなく紡ぎ出す詩人
- 3 政治やビジネスの場面で常套句を使用する政財界人
- 4 しつくりくる言葉の訪れを手探りで探索し続ける凡人
- 5 マス・メディアで紋切り型のコメントを繰り返す著名人

問9

傍線㉔「自然言語の自律性」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号

25 にマークせよ。

1 日常生活における我々の言葉は、韻律や隠喩等の豊かな創造性や柔軟性を有しているため、誰もが詩人のような創作を行なえるということ

2 日常生活における我々の言葉は、複数の意味が相互浸透を経て収束される性質を持っているため、意味は必ず一つに限定されるということ

3 日常生活における我々の言葉は、長い歴史の中で使用法が確立されてきたため、個人の思惑によって作り変えることはできないということ

4 日常生活における我々の言葉は、公的機関の力学によって意味が決められるため、凡人の違和感のみで変更することは不可能だということ

5 日常生活における我々の言葉は、主観的な使用であっても継続して用いるうちに関連性が生じるため、じっくりくるようになるということ

問10

A・Bに入る語句の組み合わせとして最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号

26 にマークせよ。

1 A 迎合 B 反骨 2 A 承諾 B 無骨 3 A 絶賛 B 硬骨

4 A 甘受 B 気骨 5 A 追従 B 粉骨

問11 傍線㊦「それ」が指し示す内容はどれか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

1 言葉の実習

2 ナチスのプロパガンダ

3 独裁制や他の政治形態

4 言語それ自体を支配すること

5 人々が言語を使用してきた長く複雑な歴史

問12 本文の内容に合致するものはどれか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

1 オーウエルの慧眼は、粗雑な政治の言葉に惑わされないよう我々が使用する言葉で「常套句」を作ったことにある。

2 言語を信頼すると常に不安や孤独感が生まれるので、我々は言語を介さずに事物と関わった時代に戻るべきである。

3 クラウスは、人々が安易に常套句を用いないことを「現に行われていることとしては最も安易な責任」だと述べた。

4 世界に対する懐疑から孤独が生じたとしても、我々は自分を欺かず自らの言語感覚を研ぎ澄ましていくべきである。

5 空虚な言葉に抗う「自然言語」は、一握りの天才しか創作することが不可能な神話作用を有する特殊な言葉である。